第二章　学生県人会による名士訪問（大正5年6月）

大正5年6月1日か
芸備医会、尼子四郎先生を千駄木に訪う

「学校の事については近くもあり詳しく知っておりました。誠に衷心同情に堪えません。しかしながらこの微弱で諸君にどうしてあげる事も出来ませんが私のごときものの名でもよきとあればどうぞ連ねて下さい。しかしながら如何してくれ、また医会のほうで何とあらば勿論熟考を要します。誠に医会にあげ評議もせねばならぬと存じます。広島県のお医者には政事思想のある御方は少ないようです。お医者よりも政事に渡ってお願いになった方がいいでしょう。高橋様[注1]、荒川様[注2]などは青年のため、県の後輩の御方にはよく尽されます。」

（注1）高橋琢也（前沖縄県知事、のち貴族院議員）：尼子四郎の紹介あってか、長青年は高橋琢也を6月2日に訪れることとなった。その訪問がその後の学生団の運命を決定づけた。
（注2）荒川五郎代議士、逓信省参政官。長青年は5月15日にすでに訪問している。

尼子四郎　１８８７年に広島医学校を卒業。１９０３年に東京で開業。芸備医会の責任者で、「医学中央雑誌」を創刊し、わが国の医学研究の発展に寄与した。千駄木に住居を構えていた夏目漱石の隣人で、家庭医であった。「吾輩は猫である」の甘木先生のモデルといわれる。

大正5年6月2日
前沖縄県知事　高橋琢也氏を麹町中六番町に訪う

六月二日午後二時～四時　　藤中正君[注1]と

「この問題が諸君等の不利となった時はただ一人のことでさえも不憫であるのにいわんや五百名の前途有望の青年とくにこの五百の学生と医師となり社会に立つ事となったら実に社会を救済するので実に大なる問題である。この重要問題が社会に知られんということは残念である。昨日も済生会[注2]の発会式に参列しその席上には高木[注3]、石黒[注4]男を始め有識名士がおられ江湖の漫談も出でたがこの問題は少しもなかった。大いにかかる人の意見を援助を仰ぐべきである。決してかかる問題に対して証介等要するもの

ではない。諸君は大いに進んで行って尽すべきである。

これは一例にすぎぬが吾輩の青年の時、学資なくただ無一で志を立て、笈を負って江戸に上がったのである。品川に上がるや殆ど金はなく、船越[注5]先生の助によるべしと船越めざして行った。先生は山阪へ行っていらっしゃるというので吾輩は然然の者である。是非先生に対面させてくれ。出来ねば出来る時まで待つ考えである。この玄関で待っていると、毛布かぶって寝ていたところが山阪氏これをきき、まず然然と船越先生に話したそうで、通る事となり、吾輩大に志を述べそれには学資なく、いわゆる飯食した上、勉強させていただきたい。勉強が目的で上京したので頼る人は船越様あるのみ宜しく頼みます。

それなら五、六日おれとのことでありました。吾輩は五、六日云々はいやである。もしこれは生業の見込みなきと思し召すなら一日でも二日でもいたし出てゆけとあらば出て行きますが、ただ五、六日とはいやです。白黒をつけてもらうまではご尽力仰ぎたいと申したら、こんなやつ中々利口いうな、それならまづ世話をしてやろうとのことでしたが。今と時が異なるがかえって今の世が容易で、そしてかかる事情で是非お多忙の御事とは存じますがしばらくお聞き下さいと依頼したら、誰でもはお聞きくださる。そして、血涙録なんか出すよりも大いに話すことがいいと思う。書いたものなんか自利のためなら見るがまだ日本の社会ではかくまで進歩してない。赤心、誠心のこもった話であったら鬼師も動かす事ができるのである。同じ義太夫でも大いにそのかたり手により如何ようでもきかれるのである。大いに

委員を派してあらゆる人を訪うのである。この発起人はよく知った人もあるようであるがこの人を知ると共に真人格もしれて居るのであるが、今も少し立派な人格の人を入れたらよかろう。人は面白きもので、その人により大いに如何でもなるのである。検察顧問官では末松子爵、金子[注6]子爵、小松原栄太郎氏、貴族院の人であるとか政党を訪うもよかろう。奥田[注7]市長にも大いにあたる必要があると思う。奥田は文相となったこともあるし教育調査会員であるし、現に市長である。この人は教育事業に随分尽す人である。余が沖縄県知事時代、時の井上[注8]文相に建白書を奉り青森、鹿児島の農林学校は出来た事になった。その建白書を見せてくれと奥田がやってきたり書き取ったこともある。其の他佐藤[注9]男もよかろう。原[注10]、犬養[注11]もよかろう。あらゆる有識に願うのである。過日旭川に税をかける事となった。それがしかも十一倍の加税で有志発起人が3名やってきて二人は同志会、一人は政友会であった。吾輩は北海道副会長に紹介し、各政堂をとかしめ、世話する人十一名つくり農商務大臣に建白書を差し出し、武富[注12]君にあって然々とはなし、これ取り消しになることと相なったる次第である。しかし、政堂とか私人の関係などあるべきではないけれども、これはよく考えてやらなければならぬことであると思う。吾輩もつまらぬながら大いに尽す考えである。」

(注1)日本医学専門学校2年生学生。広島県出身。(注2)済生会はこの年に発足した恩賜財団である。現在も済生会病院を統率する。(注3)高木兼寛(海軍軍医総監、慈恵大学の創始者)(注4)石黒忠悳(後出)(注5)船越衛(広島藩出

身、明治維新後、兵部大丞となる)。子息の船越光之丞は東京医学講習所開設のおり、協賛者となった。(注6)金子堅太郎　(注7)奥田義人　(注8)井上馨　(注9)佐藤進(後出)　(注10)原敬　(注11)犬養毅　(注12)武富時敏

高橋琢也(1847.12.17～1935.1.19)　広島市出身。明治3年開成学校南校ドイツ語教授。同時期に中濱ジョン万次郎(中濱東一郎は長男)が英語教授となっている。東京医医科大学50年史によると、明治18年山林局に入り、東京農林学校教授、林務官、農商務省山林局長となった。農商務省時代に森林法を制定した功績は大きく評価された。時の農商務大臣と議合わなかったことから山林局長を辞任した。退職後は中国亡命者の世話をしたり、趣味の骨董を集めることで過ごした。15年の隠居生活のち原敬の勧めにより沖縄県知事(明治45年～大正3年)となった。大正5年当時は原敬の政友会の機関紙「国論」の社長であった。長 委三美らの訪問により、学生団後援会の中核となって寺尾、福本、大角、秋らとともに東京医学講習所の開設にこぎつけるとともに、東京医学専門学校昇格、医師免許無試験合格の承認を得るために全財産を投げ打って努力した。東京医学専門学校開学の祖といわれる。大正8年には山林局長時代の功労と東京医学専門学校の創立の功績により貴族院議員に任じられ、大正9年にはこれらの功績により勲三等を叙された。

茅原廉三郎（崋山）先生ら一元社（駿河台鈴木町）に訪う

「まだ大角[注1]先生も学校の方よりも来ないので甚万々不明である。訴え云々（九千円に対し）と法律思想のなき己には分からぬが、しかしながら道徳上よく考える時は確かに詐欺である。この件については馳名の弁護士を頼んでやるがいいと思う。

こんな教育家の醜態は当学校に留まらんてね。先日も大井に都の女教員がきて話なすにある。女教育家が学校経営してる中々隆盛なものである事じゃ。その教育者下色男二、三人も持って〇（マル）は色男から仰いでおるということである。己の所へ来た女教育、懇々と説き諌めたそうであるが、先生中々困った様子は見えたそうであるが、よす傾向は見えず、昨今ハしきりに女教員を機嫌をとっているとの事である。そこで己が考えるに、男子の教育者は教育、美名のもとに詐欺をし、女子教育者は売陰をする、実に驚く他はない。」云々。

おりしも先生に電話あり曰く、「『洪水のあと』六月上旬号発売禁止」と。先生、一元社も一しおのさわぎ。しばしあって先生曰く、「実に天は幸いを与える。丁度、今月限り『洪水の後』をよして日本という雑誌を発巻する考えであった。今度は少し立派な雑誌を発行してみたい決心である。先日青山[注2]博士（帝大・教授）の申さるに、先生、北里[注3]博士のところに参られ、慶應に大学云々と世評あるからって聞きて見たがこれは不可能である。

到底私立の医科大学は経営困難である。東帝大など年々百万円以上いるそうである。その中、病院よりの収入が三十万円ないしは七十万円は実に国家から出しているのである。今慶應にかかる金はない。久原房之助氏[注4]が五十万円云々も無根だそうだ。西洋の如き富豪いる国ですら医科大学の私立はないそうである。米国のラブマインの如きも私立のようであるが州よりして建っているとの事である。依而ことに日本あたりでは私立医科大学の建設は今しばらく後の事と思うとの意見であったそうだ。」

（注1）大角桂厳　（注2）青山胤通　（注3）北里柴三郎　（注4）久原鉱業所創始者。

代議士、瀧口了信氏を高輪中学校に訪う

現に先生は高輪[注1]中学校の校長である。先生曰く、「今両君（藤中[注2]）の話をきき同情に堪えん。あるいは当局者については財産云々でかかる惨事起したることと思う。現に私も本願寺のためにこの中学校を引き受けて大いに困っている。幸い都のこと、信用のため二十八万円も貸ってやっておる次第であるが、

如何なるかは不明である。かく小生も経験よりして誠に同情する。又、経験もあることゆえ、諸君には山々尽くしてあげたいけれども、何しろ近頃健康を害し、その上仕事が多いので学校の一大事があるために前法主の復職問題とか、出身郡に鉄工所の云々に関したる他、郵便局、警察署置くなんか今かかってくるのでかりきれない。そこでその方にかかってやることが自信がない。ただ名のみ、暇の時なんか申すなら決していといはせぬ。愚見であろうが今一人立派なる人が出たら落着するのである。青山博士[注3]、佐藤[注4]、石黒博士[注5]等は適材と思う。福原次官[注6]とは同窓であるからよく事情を話して聞き入れてもらおう。しかし余り懇意ないので。まあそうゆうな。腕押しでしんみりきいてないで困る。会うのはよくあう。碁もよくやる。まあよく頼んでみよう。」

(注1)明治18年4月に京都西本願寺によって設立された「普通教校」が母体。明治34年に東京・高輪に移転。「模範仏教中学」「第一仏教中学」を経て「高輪中学と改称。第9代校長が瀧口了信であった。平成18年に創立120周年を迎えた。(注2)広島県出身。長 委三美の同級生。(注3)青山胤通 (注4)佐藤進 (注5)石黒忠悳 (注6)福原僚次郎文部次官

瀧口了信：高輪学園(東京都港区・高輪)の前身である高輪中学および高輪商業学校の校長を明治から大正にかけて務めた。

貴族院議員、男爵藤井中将を江戸川（二六）に訪う

「吾輩は上官の命令は事の如何を問わず絶対に服従すべしの教育を受け来るもので学生として如何なる事があろうとも先生に逆らうなんか学問すべき諸君が同盟休業なんかとんでもない事である。吾輩は大反対である。しかしながら、広島県人というから聞くのは聞こう。大体なぜそんな学校に入学したもんかね。しかもかかる学校に入学するにはよく先輩に計り後入学すべきものである。誠に広島県は昔より医学は発達した国である。従って諸先生がいる。私立学校を奨励するもののなかなか監督が出来なくて弱ってるとよく話しがあるが、かくなったのは文省の一大責任である。それがしかも五百人云々の学生であるからね。諸君の苦憂、心配は察するが学生は学生としてそんな学校はよして他の学校へ行ったらよいではないか。一日も安閑と休んでおられる時代ではない。大いに勉強した方がいいではないか。ああ一体つまらん学校へ入ったのだな。とにかく前に申した通り、吾輩は武人であるので意見も違うと思うが両君（藤中）の話を聞くといかにも気の毒と思うで聞きながしにはせん。広島県人とも話し、また聞き出来ればしかじかにと思えば話してみよう。」

藤井包総（ふじい・かねすけ）（1850.1.14～1925.12.5）　長 委三美と同じ福山市出身。福山藩藩校誠之館を卒業したのち、函館戦争に参加。１８７１年（明治４年）に陸軍工兵少尉、陸軍幼年学校校長をへて陸軍中将となる。１９０７年に男爵。貴族院議員。東京医学専門学校開校後に協賛員となっている。

大正5年6月8日(か)
順天堂佐藤達次郎博士を西片町に訪う

先生はもっとも馬を愛し給うと駿馬廊にいななきおれり。書棚にも唐金の馬像を見る。あくまでも古武士の風あり。老先生[注1]の書いと豪のと見る。日本間に通さる。夏木立いと冷しげに夕の風を送る午後五時過ぎ。先生曰く、物恥ずかしげに恥々と、「実に諸君には同情に堪えん。勿論私より翁父の心中如何と申すことは出来ざれども。元来親父[注1]はもともとより学校云々話もあったこともある。息としてもかかる事を申したら何とかするでしょう。一体考えるべきはかかる経営なんて才を有していないように見る。まず教授の方は便利のように思える。しかし磯部がひかんとしたらこれはどうも私立学校でいたし方はないと思う。幸い、売り出す意志があったらどうでもなる事と思うが、とにかく自分は同情し後援会にも加盟していいです。そして親父は茨城県行方郡麻生の別荘にいるから行って話してみたらいいだろう。」

(注1)佐藤進男爵

佐藤達次郎(1868.11.7〜1959.7.8)福井県出身。佐藤進男爵の嗣子となる。東京帝大医学部卒業。専門は外科学。東京医学専門学校初代校長となった。

大正5年6月9日
麻生の別荘に佐藤進男を訪問う
六月九日午前五時五十分上野駅発

荒川の上流、夏木立何とのう古山親しくも存ぜられ候。黄金の麦畑は、今は青々しき苗の野と相成り候。またたく間に土浦に着きしや候。ここは筑波山に至る六里の駅程の存候。ここより銚子への汽船は出で申し候。霞ヶ浦の夏景色さこそと存候。日本晴れの景色を写して鏡のごとき湖面の色、漂う浪より生るる風は船窓にそよぎつつ。げに肌涼しう夏知らずの興に候。湖辺の縁に緑なす菖蒲、水面に移りて何ともいえず申し景やに存じ候。まして川柳の五、六の様さして趣興いやまさりや候。

やがて夕ぐれの空の彩水にうつろう頃はこの船麻生に着き申候。一帯の湖岸、ぽぷらの夏風にそよぐ三、四の林あちこち。げにや霞ヶ浦の景よと存ぜられ候。絢たる四角のあづまやこそは聖の独りしたも

うところとや。小高き岡の松林こそはすみ家したもう別荘とやら。ここさして進みや候。静けきこと太古の如しとやら。

佐藤博士申さるには、「過日も県出身の御方[注1]が参られて大略承りまして私は同情にたえません。出来る事ならどうかならぬとは思っています。誰か出てなんとか尽力せんものですかね。一昨日の新聞紙にも検事取しらべとかなんとかあります。ただまだ折合いつきませんかね。実に不幸ですね。過日も更かくしもせん、心中を話しておいたが、今妻の名で美術[注2]学校を営護しておりまして随分金もつぎこみました。その学校も中途で火事など入り困りましたが幸い千五、六百の学生を出し、方進は立ったようです。もともと私は何か医学校へ尽くさんとは思っています。只に患女云々ではなくて昔は順天[注3]堂で研究生も募っていた位です。今ではすべて若いものにまかせ病院なんか殆ど出ず、月半分は此処、半分は東京で然も社交に用いています位で年よりてもなかなか多忙のものです。それで此事は皆様に同情して何とか出来れば尽くしてあげたい。然し今いうた様に一人できめられんゆえ、達次郎はじめ親族の者どもと会議を開き御返事する事といたしましょう。」

（注1）巣鴨の佐藤進邸を訪れた日本医学専門学校学生、松岡信篤、小川東洋、大森彦馬らのことか（東京医大50年史）。
（注2）現在の女子美術大学　（注3）佐倉順天堂　佐藤泰然により創設された。二代目当主は佐藤尚中で、佐藤進男爵は

三代目であった。その後順天堂医院は順天堂大学医学部となった。

佐藤進（1845.11.25～1921.7.26）　佐倉藩出身。ベルリン大学医学部卒業、同時に東洋人として初めてドクトル（博士）の称号を授与される。佐倉順天堂の佐藤泰然より始まる三代目の当主。佐藤進は東京医学講習所開設時は顧問として参加し、嗣子の佐藤達次郎を校長として派遣した。明治時代、我が国を代表する外科医であった。明治22年、外務大臣大隈重信が爆弾テロで重傷を負ったとき、佐藤の手術で一命をとりとめた。このことは本記録の石黒忠悳男爵の談でも述べられている。また、日清戦争の講和締結のために下関を訪れていた清国全権大使李鴻章が暴徒に襲われ負傷したさいにも佐藤の治療で一命を取りとめた。雅号は茶崖。

日本橋に大野銀行頭取を訪う

「兼ねて新聞紙上にても承りていましたが、かかる事情とは存じませんでした。そして貴殿方の言によれば実に磯部氏は悪らくの人ですね。私に於ても同情の余り入れとあれば後援会へもはいります。然し真の名前ばかりです。そして進(注1)は適材ではありませんです。代る高木(注2)さんか石黒(注3)さんなら政治手腕もあるが進にかかる才がないと存じます。然し進が出で諸君五百の学生が救えるとしたら大いにすすめましょう。」

(注1)佐藤進男爵　(注2)高木兼寛　(注3)石黒忠悳

大野伝兵衛：佐倉順天堂の佐藤尚中の次男で佐藤哲次郎のこと。東金町の薬種業の大野家に養子となり、大野伝兵衛と名のった。千葉県東金町に大野銀行を興した。佐藤進の縁戚ということで、長青年が訪問した。

佐藤佐先生を新花九七の私邸に

「私は名を出すという事はとかく好まないが、佐藤一門としての名なら決してこばみません。進兄のその適材たるやは存じませんがかかる意向があったとすればすすめもいたし、どうしても共にやりたいと存じます。元より貴君方とは同職業の事ですから、できるだけはある一部としても佐藤一門としてつくしたい考えで居ります。いずれ親族会議もある事と存じますかと。其時は旨をのべましょう。そして何とか返事する事といたしましょう。」

佐藤佐（1856～1919）　旧姓井上虎三。東京帝国大学医学部で森鷗外や中濱東一郎と同級生。佐藤尚中の三女と結婚し養子となり、佐藤佐と名のった。大正5年当時、順天堂医院の副院長であった。

三宅鉱一博士を

「親父[注1]を証介して呉との事か、一体何の目的やら。佐藤進先生を立てる事には賛成じゃ。私もかく考えた事もあったが親父よりも佐藤家とするとあれば達次郎先生がやるのであるから、達次郎先生より親父にたのますがいいではないか。親父なかなかがんこで単にいってる。学生は勉強さえすればそれでよしと。一体諸君のやり方がよくない。全く非立憲的である。昨日も文部の一人がどうもやり方は悪い。第三者出るとしても折が悪いと申していた。まあ私よりも何とかよく話しておこう。そしてかかる事は君らが云うよりも保証人とか後援会の諸君にたのんだらいいではないか。親父へも君等があって話すとかえって誤解をまねく恐があるから会わない方がいいであろう。立派の三者がたてば何とか出来得るる限りつくしてあげる決心である。」

(注1)三宅秀(みやけ・ひいず)(1848〜1938)　文久3年の幕府遣欧使節の一員として渡欧した。横浜で米国宣教師兼医師のヘボンに学んだ。大学東校の文部少教授をへて、1874年(明治7年)に東京医学校長心得となった。東京帝大医学部教授となり、1888年(明治21年)には日本最初の医学博士を授与された。三宅鉱一の父。佐藤尚中の娘婿であり、佐藤進とは義理の兄弟であった。

三宅鉱一（1876～1954）三宅秀の息子。１９０１年東京帝国大学医学部卒業。呉秀三（前出）の後継者。大正５年６月当時は日本医学専門学校の教授であったが、学生団に同情し、東京医学専門学校精神科学教室初代教授となった。のち呉秀三のあとを継いで東京帝大医学部精神科教授となった。

市会議員　秋　虎太郎氏を千駄木に

「後援会、懇談会を開くのはいいと思う。其発起人として経過の陳述は矢張り大角君がいいと思う。私は補助する事といたしましょう。」

秋　虎太郎　東京市会議員。日本医学専門学校学生（４年生）丸山郁雄の父、丸山長四郎と友人であったことから、学生団の後援者となった。森鷗外の弟、篤次郎と秋の弟が親しかったことが、鷗外により述べられている（後出）。また東京市施療病院の設立に貢献した藤井庄一郎事務長（後出）を助けたことも本記録に記述されている。東京医学講習所開校に向けて大きな支援を送った５名士の一人。大正５年９月11

日の開校以降は体調不良のため、高橋琢也に学校運営を任せた。

大角先生を大道社（台町）に

「佐藤[注1]先生の話をきいてうれしく思う。是非やらねばならん。それで懇談会は早いがよいと思う。これは秘密にするが良い事と思う。そして高橋[注2]さんは実に立派な人で相談柱としてやって行きたい決心である。どうか証介の労を取ってもらいたし。」

（注1）佐藤進　（注2）高橋琢也

大正5年6月12日

万世橋楼上、みかどほてるに後援会懇談会を開く。

六月十二日午後六時より

出席者三十二名　主なる人

高橋琢也君　福本日南君　斉藤孝治君

寺尾亨君　上野安太郎君　大角君

秋　虎太郎君　向軍治君　茅原華山君

熊谷直太君　笠原文太郎君　等

東京府会議長　斉藤孝治君

「私は法律上としても磯部を漸に取り去る事は出来ぬと存じます。殊に学生の一部には登校を望み、且つ古山の老親を悦ばす上に於ても一日も早く復校し其上で更に理事二名と評議員二八名位作る。今後の経営の目的に達せん事を祈ります。勿論、磯部、文部省の責任は充分問う考で居ります。」

大道社　大角桂厳氏

「私は今更磯部云々はナイト存じます。かかる偽教育者は文部のため、国家のため、教育会、否、国家(社会)よりほうむるべしと。ただ我一人のみならず。島田三郎氏も申しておられました。」

法学博士、寺尾亨氏

「先ほど斉藤先生の説も良いようなれど然し磯部氏の人格には定評あるのみならず実に学生とは絶対的入れられざる関係ある様に承りて居りますから、学生は悪まで突進せん事を祈る。其上で大いに取るべき方針を立たんと存じます。」

寺尾亨(1859.2.1～1929.9.15)福岡出身。東京帝大法学部教授。日露戦争の開戦を支持した東大7博士の一人。頭山満の盟友で、東京赤坂の住居は隣同士であった。寺尾寿博士(東京天文台台長、東京理科大学の創始者、校長)の弟。辛亥革命の指導者孫文、黄興やインド独立の志士ラス・ビハリ・ボースらを助けた。福本誠(日南)、頭山満らとともに日本医学専門学校を同盟退校した学生団を応援した。学生団幹部は大正5年6月以降、しばしば寺尾亭で会議を行なったことが「東医50年史」に述べられてあり、新校開設に向けた戦略が寺尾亨の指導のもとで練られたことは推測に難くない。寺尾亨と福本誠は高橋琢也、秋 虎太郎、大角桂厳らとともに東京医学講習所設立時の設立者となり、東京医学専門学校設立後

は理事を務めた。本記録の最終章は寺尾亨亭訪問で締めくくられてある。

慶大教授、向軍次先生

「実際私も学校騒動を起しまして今日の向軍次となった次第でございまして、公開演説の説とは異なって居りますが、武士道云々よりも世渡りの方法として斉藤氏説が深索と存じます。実際学生が困るのである。向軍次ならこそパンくってるけれども医専の学生はパンすら食う事出来ぬと存じます。要するに柔軟派ようしてこの解決につとめられたし。」

向軍次　慶應義塾大学・法学部教授

その他　高橋先生、茅原崋山先生

貴族院議員　江原素六先生を麻布中学校に訪う

「先日も申した通りに学生の為なら何でも出来る事なら尽してあげるつもりである。佐藤先生[注1]が出るという意あらば実に結構なる事と思う。出来得る限り御進めしよう。学生は行かぬ方がいいと思う。三宅秀[注2]さんとは懇意の間柄であるから明日伺って佐藤さんの立つようにと願って見ましょう。」

（注1）佐藤進　（注2）三宅秀（東京帝大医学部精神科学教室教授、前出）

江原素六（1842.3.10～1922.5.19）・幕臣として鳥羽伏見の戦いに参加。明治維新後は米国視察に加わり、殖産興業、教育事業に取り組んだ。板垣退助とともに自由民権運動に加わる。第一回衆議院議員選挙（明治23年）に当選。１９１２年より貴族院議員。麻布学園を創立。「青年即未来」を教育理念とした。

第一銀行佐々木取締役を銀行に訪う

「私は医学とは趣を異にしているから医家にはお願いする方がいいと思う。勿論同情はいたします。そして佐藤先生が立つという事は賛成です。三宅[注1]とは関係がありますが、私もなかなか多忙で急に会う事は出来ないと思うが、意向を聞きてみましょう。三宅からも出むか。私としても三宅に行きたよる事は欲せざる事で、願う事はお断りいたしたい。又後援会に入る事も許してもらいたい。出来る事なら尽すが何しろ多忙であるで、今日はこれで折角であるが失礼いたします。」

(注1)三宅秀

佐々木勇之助(1854〜1937)：渋沢栄一の片腕として第一国立銀行の発展に尽くした。渋沢栄一をついで、大正5年に第一銀行頭取となった。東京医学専門学校開設後、渋沢栄一とともに多額の寄付を行なっている。

大正5年6月18日（午前10時）
佐倉の殿様　堀田伯爵閣下を向岡の（弥生町）別邸に伺う

弱者佐倉惣五郎が強者に勝ちし。其名、なにしおう堀田の殿様、年青なれど雄を忘れぬ武者振り。頃は六月十八日午前十時。通る応接間をば奥へ奥へと緑つくせる広庭の、昔を栄をきそいほこるらん。

「大体御話を承り確かに承知いたしました。然し僕は全て速答する事をいたして居りません。それは友人なり相談する機かんもありますから。それにはかり、又、佐藤家の様子、意向も正した上で何とか御様子申し上候ます。佐藤様とは元より深き関係とも相成っとりますが、私がお進めいたしましたにより て、学校建立後で如何と相成っては誠にすみません。責任もありますから其辺ご承知下さい。」一時間余り話したのち、別れをおしむ。

堀田正恒：佐倉藩藩主正倫の息子。伯爵、貴族院議員。堀田氏所有の敷地（弥生町）は現在、東大農学部となっている。佐倉藩家老・渡辺家とは縁戚であった寺尾亨より、堀田伯爵訪問の指示がなされたのでないかと推測される。

大正5年6月18日（午後8時）
福本日南先生を丸山新町に　六月十八日午後八時

「実は其後如何して居たかと思って伺った次第であります。尚、明日は千葉へ参ります。久振りに佐藤、三宅家に就き尋ねてみようとも思っている次第です。」

「堀田伯爵より説くのも一方であると思う。学生解散をするも今少し時期を見るのが肝要である。四十七士の義侠も実は内面の苦心と時期の問題に外敵より七分苦しんで居るのである。団結は切に大切であるから。今散解すると元気がぬけるから今は少し。先にした方がいいと思う。」

福本誠（日南）（1857.5.23～1921.9.2）福岡出身。「九州日報」（現在の西日本新聞）の社長兼主筆。１９０８（明治41）年8月1日から２９５回にわたって『元禄快挙録』を執筆連載。同年12月14日、博多聖福寺で第一回義士会を主催。原三郎の「東医50年の歩み」に「気持ちの上で赤穂浪士の快挙とか、中国革命との繋がりを感じていた。それは、総退学の時に保証人として先頭に立ったのは大角桂厳であったが、その直後から学生団に同情して新校設立に熱意を示してくれたのは日南・福本誠氏と支那革命の指導者支那浪人寺尾亨博士であった。」と書かれてある。寺尾亨や頭山満らとともに孫文らの中国革命の支援を行なったり、白瀬矗中尉の南極探検資金カンパや南方熊楠をいち早く紹介するなど多彩な活動を

行った。

高橋前沖縄県知事と寺尾法学博士

「一木内相[注1]は官僚主義者であるとはいえ、実に甚だしいもので、元来府県の判任官採用は県知事の掌内にある事となって居るに、一木は大学出身の採用は内務省まで届けてくれと地方庁会議の席上内訓したそうである。」

「凡て官僚主義とはききて居たがかくまでも主義を通そうといは地方官の権威まではいり込もうとは思わなかった。」

「それは人方の登用につき堂派的の関係も意味し、政略上やるのでしょうね。」

（注1）一木喜徳郎内務大臣

大正5年6月20日

貴族院議員、男爵石黒忠悳閣下を　　六月二十日

「高橋君[注1]の紹介であるから、面会するのであるが、日本医専の学生としては会わぬ。それは紛争中の学校であるからかかることを承知なら面会するが如何しますか。」「先生の後輩として相談に預って頂きたい」というので、面会の栄を給う。

先生曰く、「両君はいわゆる漢方医なるものを知らんであろう。西洋は医学はマテーリアルサイス[注2]の発達しとる事より大いにこれを取るべきと、時の大井文部相に指摘したものである。然して、英蘭にあうってやってるに、医学のみ独に留学するべしとの説も出たようだ。第一回に洋行したのが大沢[注3]君等で僕も行ったらあるいは大阪の大家になっていたかもしれん。

その当時侍医を始め、多く漢医でなかなかやかましく僕も教職を辞していた時、杉本君が軍隊で来い

というので其時分に移った次第である。いわゆるハサミ杓をかつぎまいった。先生としては一人力で独学であったのだからあくまで、べらんめー式である。又、医師は大いに階級つけてはならぬ主義を称えておるのである。英国ではファーザーが出でこの説をとなえこれになっているが、中央医会では日本の医者など階級を申す様である。博士と学士とは許しているのである。それで先年より大いに我国の医学を紹介し、昨年、救護班を派したためか、十一日前よりこれを評したような話で中々骨を折った。そして我国の医界を考え見るに医師は充分であると思うが、これよりは大いに上医良医を要するのであるが私立医学校は不賛成である。非常に金を要するのである。一体どうしてかかることを起したのであるか。」

一々と申し上げた処、

「実に四十四円云々、磯部[注4]は不埒なやつだね。そして何を要求するのであるか。」

佐藤進氏をあげ、「第三学校の建設に先生を勧めて下さい。」

「佐藤が立って諸君を救うのは大いに賛成である。実に佐藤君は人格の点よりも財団の点よりも、クリニック完全なる事である。僕は二心はないが、佐藤が立つと相談、話し合った時は大いに進めておこう。五百の学校を云々したいものと考えていた。医学生の多くは実に女に失敗する不良青年を作るので

あるからな。」

（注1）高橋琢也　（注2）マテーリアルサイエンスの意か。（注3）大澤謙二　（注4）磯部検三

石黒忠悳（ただのり）（1845.3.18.～1941.4.26）幕府の医学所（後の大学東校）を卒業。１８７１年に軍医となる。１８９０年に軍医総監となり、陸軍省医務局長を7年にわたり務めた。後に、貴族院議員、男爵となった。森鷗外の上司である。東京医学専門学校開校とその後の発展に尽力されたことが記録として残っている（東京医科大学50年史）。長　委三美の卒業時には「研精而不倦單思而惟深」という書（巻頭写真）を寄せた。また、中濱東一郎経営の回生病院を東京医学専門学校に移譲するさい、仲介の労をとった（中濱東一郎日記）。東京医学講習所開校時に多くの協賛者（土方久元伯爵、東久世通敏伯爵ら）を推薦し、東京医学専門学校開校時には評議員となった。

高橋先生

「石黒にはなかなか会えなかっただろー。それで充分である。」

高橋先生

「近々の内に新たに入った後援会の人の懇談会の必要がある。大器晩成にやるこそ必要だ。」

秋先生、訪

「渋沢、中野は志ある人にあらず。」

大正5年6月22日か
同志会、守屋氏助代議士を

「吾輩一昨日秋田より帰った。これは秋田の名物桜桃である。おあがり。実は県人より学校の事につきいろいろと話しあって、あくる朝すぐ山根(注1)に電話をかけて一体つまらぬではないか。どうしたのじゃ。教育者は今は教育者らしく、学生は学生らしく。その父兄において如何なる憂慮をいだけしや。父として考えなければならぬ。青年は活然の勇もあるであろう。何とか方法を構ぜられたしと申してい

たら、後援会で二理事等たてて、おさめるとあったが、君等の話によれば新たに建つとの事、それは何よりだ。それなら大いに賛成する。その第三者が現れてきたら言って来なさい。大いに尽くす考えである。どうも大顔してる山根はきらいである。えらそうにするのなら、もっと何とかせねばならぬ。磯部[注2]は取るにたらんとしても山根はそれではおけぬ。子家の代表者で教育者としてあるのであるからね。」

（注1）山根正次（日本医学専門学校理事長、東京帝大医学部卒業。衆議院議員）（注2）磯部検三（日本医学専門学校理事）

大正5年6月22日
貴族院議員、江原素六閣下を麻布中学校に

六月二二日夜、ようやく会った先生曰く。

「進先生は老体を以って推したくない。そして順天堂の資金と美術学校の経営はなかなか困難しとる。然しながら学校の処置実に誠意なく、学生には大いに同情するとの返事でして、是非佐藤さんとすすめる必要がある。」

大正5年6月23日
荒川副参政官を逓信省に訪う
六月二十三日午前九時　柴田万吉氏と[注1]

いろいろ申し先生をかつぎ上げ述べた後、「実は少々用事もあったので、そして諸君が昨日もおしよせ、今日も又来るというのでゆって行った処が、巡査一はまあと申すし、学生は取り合わず、丁度群馬の遊説と出かけたのである。長君等が来たのであるで、又先輩としてなすべく実に覚書まで書き、二、三の教育者に話した次第で。それは三方互譲説なのである。文部も磯部、川上の責任あり。磯部の責や勿論、学生も人道よりして譲り解決を見たい決心で実はゆったものだが、今日長君の話を聞きて見る

処、第三者が立つ事と相成ったる由、大いに自分を信じなすべきである。委員たち代表者はゆずり合うてなくチョーシに乗り、昼夜兼行大いにやらなければならぬ。かくも進行しおれば、新たに後援者を作るよりも大いに今までの後援者を鞭撻して目的を達せられん事を。かくなると吾輩は官名あるで手出しできぬ。

吾輩も大いにやったものである。丁度日本大学の三年の時学校が殆んどつぶれかけてやっとの事でつなぎ、特待生一番で出で、そして月二五円の月給なるも金は一厘もなき次第で、今泊まっとる宿にいた。早三年もいて己れを信じてくれとるから、この下宿で厄介になり恩のある宿だ。二十年以上おるからね。そして大いにつくしたものだ。丁度虎ノ門を散歩している時、宮内の役人が曰く、この洋館も売りだす事になったと。よく問えばこは小松の宮様のものであると。これをもらいたいとの小生の考えからして松岡文相やその他の高貴の御方を訪ね、遂に小松の宮に命を得てまかり、もらい受けた次第。その移し建てるに、三千円もいる。その土地がない。その後は牛が淵前は広い広い野原で昼中砂糖屋の小僧が殺されたくらいのところであった。これが三菱が原とぞいっていた。ついにこれを借りうけ建て、今日になりきたった次第である。かく苦心してやったもので、諸君もこの事をやったなら実に一大事である。それこそ豚とり医者でなく、立派な医者である。豚とる医者でも社会の裏面を解するということは甚だ大切なことである。大いにこの不幸をして他日の幸いたらん事を期せられたし。諸君の努力や、やがて立派なる美しき実を結び、社会国家のため慶賀する次第である。」

（注1）日本医学専門学校2年生、長崎県出身

荒川五郎（1865～1944）　広島生まれ。中国新聞主筆をへて、衆議院議員。逓信省副参政官。全国私立学校協会理事長、日本大学理事、憲政会政務調査会長など歴任。

ライオン、小林富次郎氏を厨橋に

洋行帰りの取締役に面会し、来意をつげ、同情を得る。他日何らの挨拶をするとのことであった。

小林富次郎（1852～1910）ライオンは１８９１年（明治24年）に小林によって創立された「獅子印ライオン歯磨」の製造販売会社であり、花王と並ぶわが国を代表するトイレタリー企業に発展した。小林はクリスチャンの立場から、慈善事業に力を注いだ。

大正5年6月25日
高橋琢也先生を中六番の邸に　（六月二十五日）

「昨日、大角君の意件を出した時、寺尾、福本君はすぐ賛成であったので、元より私も学生の賛同なら意件無し、と通しておいた。それを見るとまだ学生の意向が不明ではないかの様に思われる。凡て何卒では人事をつくすべきであるまで尽くしてないと思う。医学の大家・吉益東洞[注1]先生曰く、人事を尽くして死するは天命なり、人事を尽くさず死するは是れ天命にあらずと。いろいろの方法を取りできざるは致方なくも先ずいろいろとやってみなくて駄目である。」

（注1）吉益東洞　江戸中期の医学者。広島藩出身。

大正5年6月26日
佐藤進男爵を巣鴨の自邸に　（六月二十六日）

「後援会委員[注1]五名は御越し下さるそうであるが、実は度々申し上げる通リ、且つ親族会議の結果にて、老体、○の問題、紛争後の学校の経営の3か条のため、御立ち申す事出来ません。同情はこの上ありません。昨夜もめし食いながら、愚妻と今卒業さる学生の方、まして両親は実にお気の毒でなりません。また磯部の人格を知るについて諸士が敵に対し悪口されぬ点、整々たる態度はやり方は実に感謝にたえません。で、この話なら三宅[注2]へ参ってお話し被下さる事を願いいたします。」

（注1）大角桂厳、高橋琢也、寺尾亨、福本誠、秋　虎太郎らの五名士
（注2）三宅秀。三宅秀は佐藤進の義兄であった。

高橋前沖縄県知事　（空白）

文学博士、医学博士、富士川游先生を西片町の邸に訪問訪う

「一体かかる事件の起こったという事は文部省にも磯部にも又学生にも責任があるのであります。かかる不完全の学校に入学したるはこれ不幸の、又責任を感ずる所以であります。学生五百の現在の立場に同情するのでこれを同情せん者は一人もありますまい。それではやってやろうと申す人は又甚だ少ないと思います。学生をいかにすべきやは大なる問題で、又、考えても居らず、今発表は出来ませんが今君の申す通り新たの学校か又、専門学校に一時的に集めて開業試験を受けさす方法と存じます。ここに新たな学校建てば此上ない。何時までも学生がにらみ合い居ることは面白くなく、又何日解決のつくことか不明である。然し、現在の状態では日本には医者は充分で、不完全の学校の建設は反対である。少なくとも三十万円以上はいりますからね。今第三者がいい人がでるかしらん。それよりもどうです、開業試験を受けては。其方がいいかとも思います。そして此五百の学生を救ったら凡てかかる事は医学界のこれ勲。佐藤[注1]、高木[注2]、石黒[注3]、三宅[注4]、実吉[注5]、大沢[注6]先生に問うたらいいと思う。私の如き者は其人にあらず、意件もなく、後援会に立ち、尽して上げることは出来ないと思います。」

（注1）佐藤進　（注2）高木兼寛　（注3）石黒忠悳　（注4）三宅秀　（注5）実吉安純　（注6）大澤謙二

富士川游（1865～1940）：広島出身。広島県立病院付属医学校を卒業。ドイツに留学し内科学・神経病学を学んだ。１９０８年より臨時脚気病調査会委員となり、脚気病の歴史などをまとめた。「日本医学史」の研究で第二回恩賜賞を授与。日本医学歴史学会を１９２４年に設立した。児童問題や教育問題などの領域でも活躍した。

大正5年6月29日

海軍軍医学校長兼施療病院長、海軍軍医総監

矢部達三郎閣下を　海軍医学校に　（六月二十九日）

「自分ハ昨年12月、佐世保ヨリ転勤シタノデ東京ノ事情ニ通ゼズ、当学校ノ事情モ心ニ落チザル処あるので御相談にあずかる事も出来んと思う。然し新聞紙上、大いに学生には同情の他はない。」

矢部達三郎（正しくは辰三郎）（1863.3.10～1924.3.29）：岡山県医学校を卒業。同窓としては秦佐八郎（サ

ルバルサンの発見)、山谷徳治郎がいる。日本人としては初めてフランス・パスツール研究所に留学。脚気論争では海軍を代表して陸軍に反対した。海軍衛生部勤務、海軍医学校教官、佐世保病院長をへて大正4年12月より東京築地・海軍軍医学校校長となった。大正8年に海軍軍医中将となる。

海軍医務局長、海軍軍医総監、医学博士
本多忠夫先生を　麹町平河町の自邸に

「自分は学校の紛争以来、新聞に又中央医会などで山根等(注1)にききていましたが、大体は今日よくよく真情を承り、同情に耐えません。山根氏は学生が困る、学生が困るとの事で、何たる言葉もない。そしてある大家が曰くとやら、学校の必要なしと。これは吾輩は反対で、医など多ければ多いほど、結構と思う。独逸のかって医学の発達も医多くて競争のためから発展するのと思う。多く決して心配なく、殊に我国は人口の増殖益なる国で外国発展仰いで、多きを恐るるや。

然し自分は官名ことに軍人であるから表に名を出して後援は出来ぬが、大に裏に尽力いたす考えであ

ります。秋[注2]さんもよくあって聞きましょう。又中央医会でも大家[注3]と話し、何とか尽し度い考えです。ここに第三者学校設立は大家とともに賛成と存じます。」

（注1）山根正次　（注2）秋 虎太郎　（注3）中濱東一郎博士

本多忠夫（1858～1928）宇都宮出身。東京帝大医学部卒業。高知県医学校兼高知病院院長として赴任したのち、海軍医学校教授となる。明治34年にドイツ留学。病理学に造詣が深かった。明治39年より海軍軍医学校長、軍医総監となる。大正3年に医務局長。東京市立施療病院の創設を強く推進した。事務長の藤井庄一郎が片腕となった。矢部辰三郎は海軍軍医学校長の後任である。また、山極勝三郎らと日本癌学会の創立に尽力した。

前代議士　井上角五郎氏を一番町宅に　（空白）

井上角五郎（1860.10.18～1938.9.23）（後出）

大正5年6月30日および7月1日
（市立）施療病院[注1]事務長、藤井庄一郎氏を病院に（六月三十日、七月一日）

「私は実に貴殿方に同情いたします。何たる磯部という人は涙のなき、義を知らぬ人でしょう。ひとえに新聞紙上如何と心配して居りました。殊に学生様の父様の割腹ときき人ながら涙にくれました。又秋[注2]さんは実に御恩のある御方で、私の生きとる間は、否、死しても忘れいたしません。同時に此の病院の発達をはかり度いものであります。

というのは昨年度の予算は一万三千八百円の減算となったのであります。一寸六万五千円程であります。これは大事といろいろと役所に願った処が無効で、院長、副院長、事務長と退辞職願を出したのであります。此時秋様大に市会で減算不可キデナイ、下民救助するに減ずるとは何たるあさましきことよと御同情下さったため、遂に元の案と相成ったのであります。まったく秋さんの御蔭であります。全く義侠に富んだ御方です。秋さんの富も実に立派なもので明治三十年頃よりのことで、市ですてる土を沼沢にすてさす一方、使役者をねぎらい、多くの地を開拓して今の官僚となられたのであります。また、本日医務局長は矢部[注3]医長とは又いっそう雄々しき偉い御方であります。是非御面会して御相談いたしなさい。

一寸、一例を申せば、先生は一生平民的に医は仁術に暮らしたい、貧民援助してやりたい。先生は医

学校に御越しの時は必ず車に、然も、人の内に診察に行かれる時は電車に。先生医務局長に栄転なるや先生物質上の賞を取られざるなり。電車のパスをと先生に伺えば、それは実に結構である。貧民の内に車でいけば、先方の車夫も気を悪しくする故、車で行かぬと。万事押して知るべし。今度の院長も偉いがしかし、一寸波がつくようであります。」

七月一日午前十時より

「只今電話で願いました処、此より逓信省に行くから今日は午後一時半より自宅に来てくれとの事です。ゆっくりと話になってそれから参りましょう。私は十六、七のころ頭を打ったため、学出来ずよって是れでは令名は出すこと出来ざる故、人を作りたい、一生に千人は作りたいものであると決心いたし、大分世話し、否、ともに勉強、パン生活して参りまして、十万以上の官僚になった人が二三人、法学の学生官が四五人、あらゆる人を出して居ります。施療病院の意は今より二十年前よりの事でようやく出来上がりました。委細は本を上げますから、御覧下さい。

随分苦心いたしました。もう一つ中等下民のために実費の病院を建てようと思って居ります。私は播州の者で父は郵便局長して居りました。当時の駅停(注4)総監品川弥次郎閣下に建白書を出し、局の線路の否、これの華かとせんことに志たるのでありました。是非上京して勉強して我国の線路改良せんと建白した処が、折をみて上京せよと郵書来る。暫くしている処、品川閣下の有馬入湯の由承り、父に其由申

し、有馬に向う。昔の事にて不便千万、旅具も具え、出発せり。

当時余は中等教員の免状を取り居りたり。在る宿に至るや、日は暮れ山路三里越えんとす。行商老人来たりこの上越えんか、二里の上下とても満足に越える人を見ず。早くこの宿に宿られたし、と。そこに一泊して有馬に着す。巡査なかなかやかましく、到底来意を告ぐる事出来ず。漸く考え出したのが扇子にその事かきつけ、放りなぜ宿に眠る。折しも侍従山下七三郎来たり、すぐ来るべしと。二階房に呼ばれうれしさたとえん物なく、閣下と間を異にしてつぶさに一々志を述べました処が閣下、此間へ来い、恐る事も遠慮もいらん。いろいろと話おる内に七時も来たり。閣下は朝飯をせらるに何とも言葉なし。かくしてるうちに、午前十一時も来たり。人の心のうるさきものにして所持せる弁当に心がつき、如何せんと思えど、何この位の事堪えるべし、忍ぶべし、ここが大事と我慢して居る内、閣下は又もや、昼食さる。然して午後四時に至たり、堪えかねて、甚だ恐縮いたしますが、飯をいただきとう御座います、と述ぶや、おお忘れてた、さあさあおあがり。山下御馳走してあげて呉れ。いや、ここに弁当を持って参りました。と御馳走いただきしも、うれしく何とやら食す事も出来ず。閣下うれしさの余り食すことができません、と述ぶや、やや、まま、こちら来るがいい、一所に食べよう。暫くおる内、用事のため閣下は京都に出発、留守をして居てくれとの事聞き受けてる内、今度は東京へ急行するから、しばらく古山へ帰りおれ、そのうちに様子するから参れ。其内閣下は独逸の特命全権公使として派遣さる事となりまして、閣下の御子供様、同行勉強の由。閣下曰く、子供行くから、汝も行こうと、神戸よ

り三浦氏を遣わされ、喜び神戸に至る。時しも明治十六年三月十一日の頃なりき。不幸、出帆前に病気にかかり閣下はために用事とて、京都に参られ、次の出帆おまち下さる。これに間にあわず一人残る事となる。閣下出発の節上京勉学する志ある故、よろしく頼むと逓信省参生官の一人を頼みおき下さる。そのうち上京して逓信省の吏員となる。

其頃より学友の資金なきもの二、三人を養う。時の江戸局長今では全局の長とも申すべきもの、余の建白をいれず、それは本官のする処でだまれと申す。よりてフロックコートを作り、それに短刀をかくし局長の室に入り、膝づめ談判したる後、かかる局長をおくは国家のため甚だ悲しむと、刀抜くや否や、窓より走り逃ぐ。折りしも、前島密男来たりいろいろとなだめ下さる。

昨日逓信省にて前島男の銅像除幕式がありましたが実に我国の通信の神であり通信さんたんの結果で其功や大であります。何しろ私のある処、その日より二十五円に俸給をあげるとの辞令をいただきました。元よりかかる野心あってやったものでありませんから、その席上で又破ってしまいました。よいよ免職となり、品川閣下は胃病のため帰国となられ青山に療養中早速来れとの事にて参れば、

汝は半紙の価を知れりや。　否
美濃紙の価を知れりや。　否
半紙は何枚か一帖なりや。　十四枚

美濃紙は何物か一帖なりや。　四十八枚

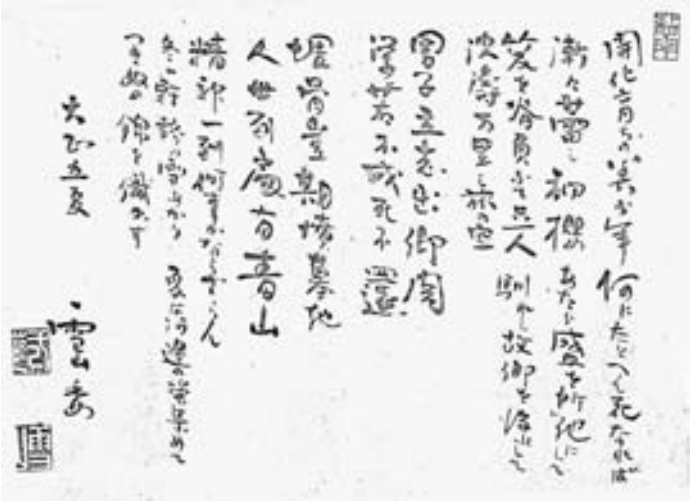
「下宿料は月いくらか。」　「二、三人も生活しているから存じません。」

「然らばよし、大いに遊べ。何もする必要なし、大いに遊べ。」

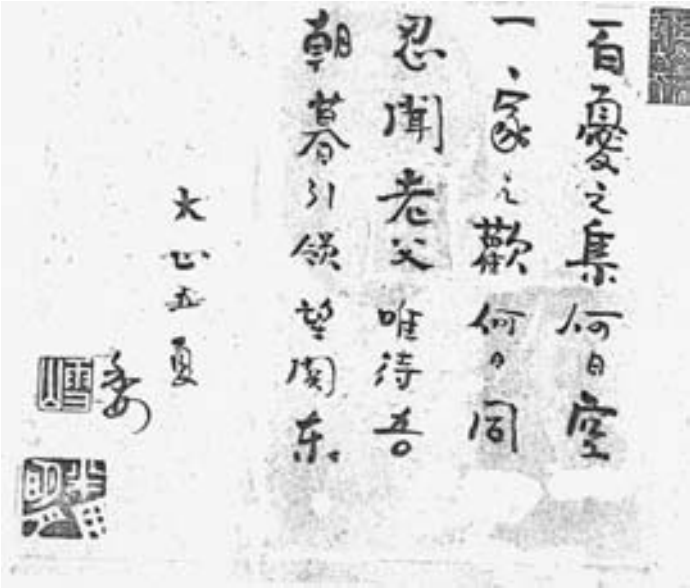
そこで女郎と酒遊せざるのみ。毎日毎日大いに遊びました。かかる様な生活で当時の様は思いやれます。品川閣下の人格も又思いやられます。実にえらい御方で御座いました。私もそれからよいよ苦心したもので、二、三人生活してるが金なく、毎日毎日たくわんかじった事もあります。これを卵焼きと申します。生活したのか苦しめたのか存じません。従って家内も、かかる生活したもので苦しくは何とも存じません。私がいよいよ金なくなり大道に古物商をやったです。其時、幸運にも海軍省の橋のうり下げがありまして、これにあたり三百円をもうけました。これがもとで、一時は十五、六万円の金もちとなりました。又みたしてしまいました。其当時国からは一の家老の娘をもらいくれとありましたが、かかる女はいやであると意は下申し出で、それをききある家老が是非おめにかかり意見を聞かんとの事でつぶさに其かせぎを申した処が大いに賛し、とにかく一時心を見てくれとの事で、十日余り、古道具の番頭をさしました。なかなかよくおやり、また苦楽をともに出来るのでもらった女ですから、苦なんか何とも思いません。」

（注1）施療病院は東京市で初めての総合病院であった。築地の海軍医学校の隣にあったことから、海軍軍医の研修施設として利用されていた。海軍軍医総監の本多忠夫（前出）はこの病院の立ち上げに加わった。また、当時の病院長は矢部辰三郎だった（前出）。同病院は戦後、米軍により接収された。

（注2）秋　虎太郎　（注3）矢部辰三郎　（注4）長州藩出身。明治維新に功。



長 委三美(雪山)書1



長 委三美(雪山)書2